学長挨拶　明治学院教育の柱として

本学の 10 年後の「あるべき姿」を想像し、将来を見据える中長期計画を定めた MG Decade Vision が 2015 年度よりスタートしました。内容は多岐にわたりますが、そのなかでは三つの柱が建てられています。すなわち、グローバルマインドの醸成、ボランティア活動の活性化、キャリア支援の三つです。ボランティア活動の活性化は、ボランティアセンターの活動によるところが大きいことは論をまたないところです。最近の動きでは、「明治学院大学 教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム」が 2016 年度からスタートしています。このプログラムは、実際のボランティア活動、教養教育センターや各学部・学科が提供する科目、インテグレーション講座から成り立っており、ボランティア活動と教育を結び付けようとするプログラムとなっています。

本学の場合、ボランティア活動は一種の学風の一つであったといえるでしょう。戦前には、貧困地域への支援をおこなう学生セツルメントが活動しており、阪神・淡路大震災支援では学生たちがいち早く動き始めていました。東日本大震災支援でも学生たちの積極的な姿勢や活動に加えて、現地に行けなくてもできる活動（吉里吉里（きりきり）語辞典の作成等）の模索などユニークな活動が生み出されました。熊本地震の際には、募金活動や現地活動の展開に加えて、被災により大きなダメージを受けた障がい者の作業所が製造するクッキーの販売支援（本学で販売した売上の一部を支援金とする）など、現地に行かなくてもできる活動が展開されました。誰でもができる活動の提示やコーディネートも、ユニークな活動といえるでしょう。

また 1 日社会貢献プログラム「1 Day for Others」の取り組みを通じて、日常的な活動へのきっかけを提供していることも本学ボランティアセンターの特徴です。実際に、ボランティアセンターを通じて多様な活動に学生が参加しています。ボランティアセンターは、学生メンバーの参加と、職員、コーディネーター、教員、相互の協力があって全国的な先駆け、モデルとしての位置を確保してきました。

私事になりますが、昨年は岩手県大槌町を訪問させていただきました。東北豪雨による被害とその後の復旧にとりかかられる時期でした。もちろん、東日本大震災からの復興も道半ばでした。特に耐用年数が過ぎ、高齢者には生活しにくい間取りや生活設備のままとなっている仮設住宅を見せていただいた時に、改めて震災被害の深刻さを実感しました。私とは別ルートで現地に到着した学生たちは、吉里吉里学園小学部の子どもたちと吉里吉里カルタを使いながら、郷土の言葉や習俗の学習に取り組んでいました。学生たちも子どもたちに鍛えられ、教えられることが多かったようです。「忘れない」ことの大切さを再認識した訪問となりました。これからも本学は「Do for Smile@東日本」プロジェクトとして支援を継続してまいります。その拠点はボランティアセンターにほかなりません。

さらに、国際的な視野をボランティアセンターは持ち始めています。この報告にも記載されているように、海外スタディツアーは参加者に新たな視野と学びの機会を提供することができました。単なる「旅行」ではなく、事前学習と事後の報告会等の学びが提供されるからこそ、このプログラムの意義が鮮明なものとなっています。

「明治学院大学 教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム」が本格的に動き始めるなかで、本学の風土を大切にしながら、新たな風を巻き起こしていく存在としてボランティアセンターのさらなる発展を期待しています。

2017 年 3 月

学長　松原康雄

ボランティアセンター長挨拶
「明治学院大学 教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム」の開始　大学の授業とボランティア実践の融合を目指す

今年度（2016 年度）に、ボランティアセンターは、2 年間の検討・準備を経て、すべての学部・学科および教養教育センターと連携し、授業とボランティア実践を融合させた「明治学院大学 教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム」（以下、本プログラム）を開始しました。

このプログラムでは､ボランティアを実践する学生が学部･学科で指定された専門授業科目を修得し、実践と大学での学びを関連づけることにより、サティフィケイト（修了証）が取得できます。

その特徴は、このプログラムがボランティアセンターの枠を超えて実施され、大学全体として、教員がボランティア実践に教育の視点から関わりながら、より多くの学生が専門の学びと関連づけてボランティア実践に取り組めるように体系化をおこなった点にあります｡ボランティア実践の部分については、すでに 2011 年度に 1 日社会貢献プログラムとして「1 Day for Others」が開始され、学生がボランティア活動に取り組みやすいように体系化がおこなわれています。

本プログラムでは、初年（2016 年）度には、約 120 名の 1 年生が登録し、教育とつなげるインテグレーション講座を受講しつつ、ボランティア実践を進めています。翌 2017 年度に学部・学科の教育と本格的に連携する段階に入り、2018 年度に最初のサティフィケイトの授与がおこなわれる予定です。

ボランティアセンターは 1998 年の設立以降､学生がボランティアセンターに学生メンバーとして所属し、プログラムの企画・運営に関わりながら、学生とともに社会・地域の課題をとらえて個別のプログラムを実施してきました。こうした個別プログラムの蓄積に基づき、2011 年度からの 1 日社会貢献プログラム「1 Day for Others」、2016 年度からの授業と連携する本プログラムを実施することによって、ボランティアプログラムの体系化に取り組み、大学全体でより多くの学生がボランティア実践を積極的に進める、ボランティアから学べる環境づくりを進めています。

こうしたボランティア実践・教育連携の検討過程において、ボランティアを実践することによって、学生は何を獲得し、何を学び、学生にどのような意識・行動の変化が生じるのか、ボランティア実践の成果・アウトカムの把握に注目するようになりました。近年、研究・政策の両面において、社会的プログラムの成果把握の重要性が指摘されており、ボランティアセンターでも、ボランティアプログラムの成果把握・プログラムの評価は重要な課題の一つです。これまでは、ボランティア実践を通じて、個別の学生が成長する姿を成果として見てきましたが、今後はこうした学生の変化や成長をより客観的に把握するために関連するデータの収集を開始しました。

また、2016 年度には、明治学院の中学・高校・大学において、ボランティア教育の連携と実践の強化について、三つの組織が集まり検討も開始されました。キリスト教による人格教育を基盤として、中高大において一貫したボランティア教育の環境づくりもおこないたいと考えております。

2017 年 3 月

ボランティアセンター長　西村万里子